

1. はじめに

2012年8月、ロンドンオリンピックが成功裡に幕を閉じた。日本選手団の活躍に勇気と感動を覚えたことは記憶に新しいところである。

さて、ロンドンオリンピックで活躍した選手の多くは、高体連活動を通してたくましく成長し、世界で活躍するアスリートとなった。高体連の活動が高校生アスリートにとって重要なものであるのは言うまでもない。この素晴らしい高体連活動の意義については、平成16年度の三重県で開催された全国高体連研究大会において「みんな昔は高校生」と題してアテネオリンピックの新聞記事を展示し、入賞者の出身高校も含めて紹介をした。

一方で、「スポーツ」が「するスポーツ」だけでなく「みるスポーツ」「支えるスポーツ」として魅力ある場であり、熱心なサポーターに支えられる各種目の日本代表や、国民的大会となっている箱根駅伝など、さまざまなスポーツ活動が多くの人々の参加により支えられ、人気を博している。

高体連の活動も、高体連に加盟する選手だけのものではなく、多くの人々が参加し、「するスポーツ」だけでなく「みるスポーツ」「支えるスポーツ」として魅力ある場であると考ええる。

2. 研究の目的

本研究では、三重県の高体連主催の陸上競技の舞台を活用しながら、吹奏楽部や新聞部、書道部などの高文連に加盟する部活動、さらには、地元FM局やケーブルテレビとのパートナーシップを築くことにより、大会を盛り上げ、文化部の高校生には新たな活動の場を提供し、三重県の高中生全体の活動が活性化することをねらいとした。

3. 取組の背景

洋の東西を問わずオリンピックなどの総合開会式では、式典を盛り上げるためにいろいろな催しが行われてきた。古くから、スポーツと文化は結びつきが深い。ロンドンオリンピックの開・閉会式は「イギリスの歴史と誇り」を合言葉としてセレモニーの理念が鮮明に伝わってきた。

昭和39年の東京オリンピックの開会式では、前日までの雨が嘘のように晴れ渡った青い空、オリンピックマーチの軽快なリズム、一糸乱れぬ隊形で堂々と行進する日本選手団の姿から「復興する日本」を世界中に伝えた。

昭和48年、三重県で行われた全国高校総体の総合開会式においても、郷土色豊かなマスゲームが行われ、英虞湾をイメージした波と筏の中を雄大に舞うトビウオの姿は観客の心を虜にした。この部分は今でも地域の中学校（伊勢市立厚生中学校）の体育祭のマスゲームの演技内容に受け継がれている（最終頁参照）。

高体連が提唱する全国高校総体での「一人一役運動」は高体連活動の大きな柱の一つとして今日にいたっている。

さまざまな先人の努力と活動に敬意を表しつつ、「総合開会式だけではなく、陸上競技において他の団体の協力を得ながら大会を活性化し、盛り上げることはできないか」と、三重県高体連陸上競技部委員長に就任以来、常々考えてきた。

4. 高文連と連携を探る

平成20年、岐阜で行われた東海高校駅伝大会開会式において、参加生徒への歓迎と激励の意味を込めて、岐阜高校合唱部が高体連の歌と課題曲など数曲を披露してくださった。大変すばらしいことであると同時に、「三重県でもこのような取り組みが大会の中で行うことができないか」と考えた。

そこで、翌年三重県で開催された東海高校駅伝において、発着拠点である三重高等学校吹奏楽部にお願いし、

スタート前にマーチングと演奏を披露していただいた。

オリンピックやインターハイなどでも総合開会式や閉会式などでマスゲーム等のイベントはあるが、今回は一つの種目の競技の中に他の団体の活動を入れるということが少し新しい試みであると考えている。

これ以降、この取り組みは昨年度まで県高校駅伝大会で継続し行われており、平成23年度においては、スタート直前の演奏（演奏終了後「位置について」の合図）や、トップチームのゴール時に演奏するなど、発展を続けている。三重高校吹奏楽部の顧問の先生や部員たちも喜んで協力をしてくれており、地元を盛り上げる企画となった。実際、地域住民からの駅伝による騒音に対する苦情は、ここ数年ほとんど聞こえてこないのが現状である。

並行して、県内高校の写真部や新聞部から県駅伝大会の取材申し込みがあり、大会運営に支障をきたさない限りの活動を認めてきた。

5. 継続した取り組みと思いがけない出会い

前述のとおり、全国高体連研究大会三重大会（平成16年度）において、アテネオリンピック出場者の新聞記事を、「みんな昔は高校生」とした展示を行った（最終頁参照）。高体連活動が在籍の三年間のみならず、オリンピックにまでつながり、将来にわたって関係し、発展していていることについてアピールした。

その後も新聞の切り抜きは個人的に続けていた。初めは、三重県の高校生の陸上競技の話題を、そこから他の高校スポーツへと波及し、やがて文化部の記事も切り抜くこととなり、最終的には高校生（一部中学生も含む）が扱われている記事すべてを切り抜くようになった。

その取り組みの中で、鈴鹿高校書道部の活躍を知ることになる。記事の内容は書道パフォーマンスが中心に記載されていたが、顧問の山田順子先生とお話をしたところ、鈴鹿高校書道部は書道を様々な視点から追究していることが分かった（写真1）。



写真1（朝日新聞 H24.4.20）

そこで、改めて今回の趣旨（他の分野が連携して新しいものを作り上げる）を説明し、協力をお願いしたところ、この活動に快諾をいただいた。

具体的には、平成 24 年度県高校総体で、電光掲示板に表示される「開会式」「表彰式」等の、文字を書いてもらった（写真 2）。このような活動は大会を盛り上げるとともに、書道部員にとってもよい活動の場となっている。開会式には、二名の鈴鹿高校書道部員が駆けつけてくれた。

また、全国高校総体に出場する陸上競技の選手に配布した T シャツのバックプリントの原稿も鈴鹿高校書道部に依頼した。（三重にある旧国名の伊賀 伊勢 志摩 紀伊の文字を三重県の形にしたもの）こちらのアイデアに対し、鈴鹿高校書道部の部員が形にしてくれた。（写真 3）



写真 2 県総体での鈴鹿高校書道部による文字



写真 3 T シャツ原稿

6. 三重県高等学校駅伝競走大会での取組

11月11日（日）、三重県松阪市にて行われた県高校駅伝大会では、2校の文化部と連携を取り、大会を運営した。

鈴鹿高校書道部員には、襷に刺繍する「大会名」と「はじめの一步を大切に」、「絆」という、高校駅伝の伝統校、三重県立伊賀白鳳高校（旧上野工業高校）の前監督である故町野英二先生の言葉を書いてもらい、完成した襷を参加全チームに記念品として配布した。（写真4）

雨の降る中、三重高校前では、三重高校吹奏楽部がスタート5分前に昭和50年の三重国体の楽曲を、スタート直前にはファンファーレを演奏してくださった（写真5）。その演奏に鼓舞されるように選手たちは懸命に襷をつなげた。トップチームゴール時にも演奏を行ってくださり、大会に華を添えていただいた。

また、これらの活動は、三重県高体連陸上競技部の活動を活性化させるのはもちろんのこと、高文連加盟クラブと連携しパートナーシップを構築することで、三重県全体の高校生の活動の発展に寄与するものと確信している。

さらに、この取り組みを「異分野との連携で作り上げる新しい舞台の構築」ととらえると、連携するパートナー探しの世界は高校の枠をも超えて無限に広がっていく。

三重県高体連では三重県高校駅伝のさらなる発展を目指すために、地元のケーブルテレビ局やFMラジオ局とのさまざまな連携を模索した。

地元ケーブルテレビ局は取材に訪れ、駅伝の様子はもちろんのこと、演奏する三重高校吹奏楽部についても取材を行い、放送してもらった。

地元のFM局には「番組内で途中経過でもよいから放送することができないか」と高体連からお願いをした。依頼に伺った時には、担当の方は「前向きに検討する」との回答であった。大会がある週の情報版組では、三重県高校駅伝について取り上げていただくことができた。当日の放送では、音楽番組の冒頭のトークの中で駅伝の結果について触れてもらうことができた。将来的には「県高校駅伝のラジオ中継復活」を見据えて努力していきたいと考えている。



写真4



写真5

7. 先人の知恵と財産を未来へつなぐ

前述の県駅伝ラジオ中継は、以前は三重県でもNHKラジオで放送されていた。東海高校駅伝や東海高校総体も私が高校生の頃は、放送されていた。全国高校総体開会式も生中継で放映され、中学生の私はテレビを見て胸躍らせたものである。陸上競技は昔から競技会も生中継されていたが、今年度は録画での放映となった。高校生にとってテレビに映ることは大変な誇りである。いろいろな障壁があるのであろうが、「先人が切り開いてきた財産をこれからも大切に育てて発展させたい」と高体連に関わる一人として心に誓っている。

8. 「夢物語」で思うこと

平成30年度には東海地区で全国高校総体が開催される。現在のところ、三重県が主会場になる可能性が高い。全くの夢物語の段階ながら、個人的に、新しいスタイルの開会式があっても面白いと思っている。

三重県で生まれ育った金メダリストの吉田沙保里さんは津市の久居高校出身、野口みずきさんは伊勢市の宇治山田商業高校出身である。お二人以外にも三重県ゆかりのアスリートはたくさんいらっしゃるので、例えばこの貴重な人材を活かせないかと考えている。

また、「三重県ゆかり」をキーワードとして考えると、三重県の高校を卒業した著名アーティストもたくさんいらっしゃる。西野カナさんやMs. O.O.J.Aさん、平井堅さん、椎名桔平さんなどの様々な分野の著名人と現役高校生との競演は考えただけで楽しくなってくる。

昭和48年度に活躍された方々をお迎えするのも良いかもしれない。実現には多くの障壁があるだろうが、可能ならば行いたいものである。自由な発想で考え・・・ キャッチフレーズは「お帰りを。ふるさとへ・・・」

このほかには、鈴鹿高校書道部の皆さんに、3つのKの高体連マーク「KRAFT(力) KUNST(技) KLARHEIT(明朗な精神)」を「日本語に置き換えて表現できないか」とお願いをしてある。これはかなり難しいらしく、三重県地図のようにはいかないと報告を受けている。

また、来年度の東海高校駅伝を視野に「東海4県の地図を書道で表現して欲しい」とも依頼し、原稿を仕上げてくださいました。(写真6)

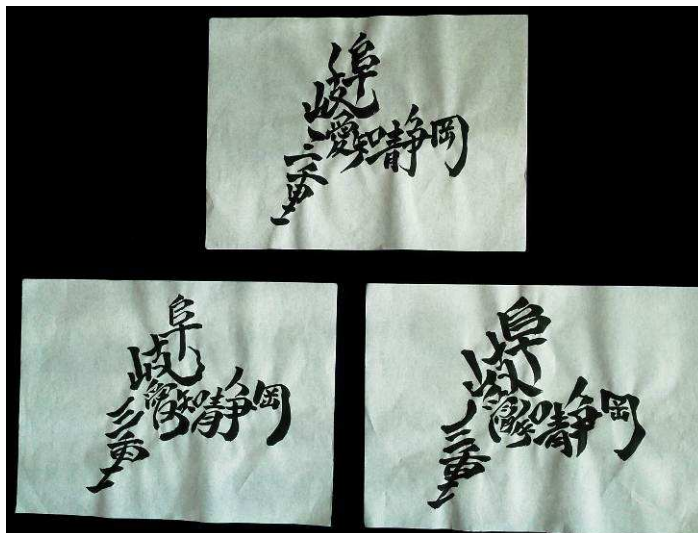


写真6 東海4県の図

9. 最後に

本研究では、さまざまな連携を模索し、パートナーシップを築くことにより、競技者である高校生がこれまで以上に活躍するとともに、競技者以外の高校生（高文連所属の高校生）の活躍によって、各種大会がさらに発展する可能性を示した。

今回の取り組み（実現したもの）は、本当に小さなものではあるが、「夢」への、まさに第一歩であると考えている。

このような取組を含め、これからますます高体連活動が発展し、活性化することを願ってやまない。

付録

1 みんな昔は高校生（全国高体連研究大会三重大会展示 H16 年）



2 伊勢市立厚生中学校マスゲーム

(S48年三重インターハイのマスゲーム「トビウオ」を継承している)

